

石田 憲先生 略歴

- 一九五九年 七月二〇日 東京都文京区生まれ
一九八三年 三月二四日 国際基督教大学教養学部卒業
一九八三年 四月 一日 東京大学法学政治学研究科入学
一九八五年 三月二九日 法学修士（東京大学）
一九九二年 二月二〇日 博士（法学）（東京大学）
一九九三年 四月 一日 大阪市立大学法学部助教授
一九九七年 一〇月 一日 千葉大学法経学部助教授（国際政治）
二〇〇〇年 一〇月 一日 同教授
二〇〇八年 四月 一日 千葉大学人文社会科学研究所教授に配置換
二〇〇九年 四月 一日—二〇一一年三月三十一日 千葉大学人文社会科学研究所科長
二〇一四年 四月 一日 千葉大学法政経学部教授に配置換
二〇一七年 四月 一日 千葉大学大学院社会科学研究院教授に配置換
二〇二五年 三月三十一日 定年により退職
二〇二五年 四月 一日 千葉大学名誉教授

石田 憲先生 主要著作目録

I 著 書

日本語

石田憲『地中海新ローマ帝国への道——ファシスト・イタリアの対外政策 一九三五—一九三九』東京大学出版会、一九九四年。

一九九四年。

下斗米伸夫、五百旗頭真編『二十世紀世界の誕生』（二人

の駐英大使——吉田茂とデューノ・グランディ）情

報文化研究所、二〇〇〇年。

小林正弥編『丸山眞男論——主体的作為、ファシズム、市

民社会』（第四章「丸山眞男とレンツォ・デ・フェ

リーチュエ——二つのファシズム論」）東京大学出版会、

二〇〇三年。

石田憲編著『膨張する帝国 拡散する帝国——第二次世界

大戦に向かう日英とアジア』（第三章「帝国と介入——

ヨーロッパとアジアにおけるイギリスの国際金融政

策」「はじめに」「おわりに」）東京大学出版会、二〇

〇七年。

工藤章、田嶋信雄編『日独関係史一八九〇—一九四五 II

枢軸形成の多元的力学』（第三章「同床異夢の枢軸形

成——一九三七年のイタリアを中心に」）東京大学出

版会、二〇〇八年。

記録集編集委員会編『南京事件70周年——国際シンポジウ

ムの記録』（日伊両国における戦争犯罪——3つの歴

史的比較の視座）日本評論社、二〇〇九年。

石田憲『敗戦から憲法へ——日独伊 憲法制定の比較政治

史』岩波書店、二〇〇九年。

国立歴史民俗博物館編『韓国併合——一〇〇年を問う 二

〇一〇年国際シンポジウム』（イタリアのアフリカに

おける植民地との比較から）岩波書店、二〇一一年。

石田憲『ファシストの戦争——世界史的文脈で読むエチオ

ピア戦争』千倉書房、二〇一一年。

石田憲『日独伊三国同盟の起源——イタリア・日本から見

た枢軸外交』講談社選書メチエ、二〇一三年。

趙景達、原田敬一、村田雄二郎、安田常雄編『講座 東ア

ジアの知識人 第5巻——さまざまな戦後 日本敗

戦（一九五〇年代）（丸山眞男——イタリアとの比較

に見るラディカル・デモクラット像）有志舎、二〇

一四年。

高橋進、村上義和編著『イタリアの歴史を知るための50

章』（エチオピア戦争、スペイン内戦介入から第二次

世界大戦へ——ファシスト・イタリアの黄昏）明石

書店、二〇一七年。

石田憲『戦後憲法を作った人々——日本とイタリアにおけるラディカルな民主主義』有志舎、二〇一九年。

金澤周作監修、藤井崇他編著『論点・西洋史学』（Ⅴ—11「ファシズム論」）シネルヴァ書房、二〇二〇年。

五十嵐誠一、酒井啓子編『グローバル関係学7 ローカルと世界を結ぶ』（地中海におけるヨーロッパ内植民地

——ドデカネス諸島をめぐる新たな帝国主義と抵抗運動のグローバル・ネットワーク）岩波書店、二〇二〇年。

永原陽子、吉澤誠一郎責任編集『岩波講座 世界歴史 20

二つの大戦と帝国主義Ⅰ 20世紀前半』（ファシストの帝国——ヨーロッパ内植民地としてのドデカネス）岩波書店、二〇二二年。

桑名映子編『文化外交の世界』（ファシスト新外交の展開——一九二一〜三五年におけるイタリアの対外文化政策）山川出版社、二〇二三年。

石田憲『戦争を越える民主主義——日本・イタリアにおける運動と熟議のデモクラシー』有志舎、二〇二四年。

英語

“The German-Japanese-Italian Axis as Seen from Fascist Italy.” Ed. by Kudo Akira, Tajima Nobuo and Erich Pauer. *Japan and Germany: Two Latecomers to*

the World Stage, 1890–1945. Vol. II: The Pluralistic Dynamic of the Formation of the Axis Folkestone: Global Oriental Ltd, 2009.

Japan, Italy and the Road to the Tripartite Alliance. London: Palgrave Macmillan, 2018.

イタリア語

“Il problema dei crimini di guerra in Giappone e in Italia. Tre punti di vista comparati.” A cura di Giovanni Contini, Filippo Focardi e Marta Petricoli. *Memoria e rimozione: I crimini di guerra del Giappone e dell' Italia.* Roma: Viella, 2010.

Ⅱ 論文（研究ノートを含む）

日本語

「ファシストの戦争——イタリア側から見たエチオピア戦争」『法学雑誌』（大阪市立大学（一）：第四〇巻、第四号、（二）：第四一巻、第一号、一九九四年。

「幻の国際義勇軍——エチオピア戦争再考」『千葉大学法学論集』第一三巻、第一号、一九九八年。

「日本から見た国連改革論の三潮流」（研究ノート）『千葉大学法学論集』第一二巻、第三号、一九九八年。

「イタリアにおける戦争の記憶」（研究ノート）『千葉大学

法学論集』第一七巻、第四号、二〇〇三年。

「日伊外務省と反共主義的国際観——三国同盟の起源をめぐって」『千葉大学法学論集』第一八巻、第一号、二〇〇三年。

「敗戦と憲法——日独伊三国における憲法制定の比較

(一)」『千葉大学法学論集』第一九巻、第二号、二〇〇四年。

「敗戦と憲法——日独伊三国における憲法制定の比較
(二)」『千葉大学法学論集』第一九巻、第三号、二〇〇四年。

「イタリア版劇場政治——ベルルスコーニ前首相の対外
「失言」録に見るメディア・ポピュリズム」『法学雑誌』(大阪市立大学) 第五四巻、第二号、二〇〇七年。

「文学から見た戦争——エチオピア戦争と日中戦争をめぐって」『千葉大学法学論集』第二五巻、第一号、二〇一〇年。

「憲法を作った人びと——高野岩三郎を中心として」『千葉大学法学論集』第二九巻、第一・二号、二〇一四年。
「民主共和国への孤独な伴走者——ウンベルト・テッラ
チーニと憲法の系譜」『千葉大学法学論集』第三〇巻、
第一・二号、二〇一五年。

「思想の言葉」、「帝国をめぐる「文化外交」——伊英関係
におけるマルタ言語問題」『思想』一一〇七号(二〇
一六年七月号)。

「バルチザンの共和国——イタリア戦後民主主義への道
程」『千葉大学法学論集』第三六巻、第三・四号、二
〇一二年。

英語

“Mussolini and Diplomats in the Ethiopian War: The
Foreign Policy Decision-Making Process in Fascist
Italy.”『法学雑誌』(大阪市立大学) 第四二巻、第四
号、一九九六年。

“Racisms compared: Fascist Italy and ultra-nationalist Ja-
pan.” *Journal of Modern Italian Studies*, vol. 7, no.
3 (autumn 2002).

“The Conservative Politics from the Historical Perspec-
tive of the Japanese Constitution.” *Lecture Series
Proceedings: Special Project for the 20th Anniv-
ersary of Gwangju Biennale*, Sweet Dew-since
1980 (March 2014–October 2014), Gwangju Bien-
nale Foundation.

“Axis Diplomacy in Comparison: The Japanese and Ital-
ian Foreign Ministry in the 1930s.” *Stgle XX: re-
vista catalana d'història*, ISSN electrònic: 2339-6806,
no. 7 (2014).

イタリア語

“Due interpretazioni del fascismo in Italia e Giappone: Renzo De Felice e Masao Maruyama.” *Italia contemporanea*, numero 223 (giugno 2001).

“Crimini di guerra in Giappone e in Italia: Un approccio comparato.” (英文原稿より伊語訳) Tra. da Marta Petriccioli e Paola Redaelli. *Italia contemporanea*, numero 251 (giugno 2008).

“Studio politico comparativo sulla Seconda Guerra Mondiale fra Giappone e Italia.” *Atti della Settimana della lingua italiana nel mondo 2016* (2017).

Ⅲ 研究集会報告・コメント

Institute of Historical Research, London 国際史部会
「英文報告」二〇〇二年一月二二日

“A Comparison of Italian and Japanese Foreign Policies in the 1930s.”

Firenze, Palazzo Strozzi, Sala Ferruccio
Memoria e Rimozione: I crimini di guerra del Giappone e dell'Italia
「英文基調報告」二〇〇七年九月二四日
“War Crimes in Japan and Italy: Three Historical View-points of Comparison.”

Istanbul, Yildiz Technical University, International Symposium, “The Middle East and the Axis Powers in World War II”
「総合コメント (英語)」二〇一〇年二月五日

比較政治学会「自由企画⑥「変動期の政治学」報告」二〇一〇年六月二〇日
「第二次世界大戦後の日独伊三国における憲法制定過程」

Wassenaar (Holland), The Netherlands Institute of Advanced Study in the Humanities and Social Sciences (NIAS), 29–30 October 2010, “We the People” and the Post-1945 Constitutional Founding in Asia: A Comparative Perspective, organized by the Harvard-Yenching Institute
「英文報告」二〇一〇年一月二〇日

“Constitution-Making Compared: The Formation of New Constitutions in Italy, Germany and Japan.”

The University of Western Australia, Conference of the Australian Association for European History, 11–14 July 2011, オーストラリアのヨーロッパ史研究会大会
「英文報告」二〇一一年七月一四日
“From Defeat to the Constitutions: Comparative Study

on the Formation of New Constitutions in Italy, Germany and Japan.”

Goldsmiths College, University of London, 民主主義セミナー
「新しい英文報告」二〇一二年三月一二日

“War Crimes in Japan and Italy: Three Historical Viewpoints of Comparison.”

The 2nd Session of Gwangju Symposium, Gwangju, 19 September 2014, 光州シムンナ・シンポジウム
“Globalization and the Crisis of Democracy” 新澤
「英文報告」二〇一四年九月一九日

“The Conservative Politics from the Historical Perspective of the Japanese Constitution.”

International Winter School in History, 1-7 February 2015, University of Pavia, パヴィーア大学における
中講義 二〇一五年二月七日

“Axis Diplomacy in Comparison: The Japanese and Italian Foreign Ministry in the 1930s.”

日本政治学会共通論題「憲法と政治」報告 二〇一五年一
〇月一〇日
「歴史と比較に見る憲法と民主主義」

Italia-Giappone, Influenze e Scambi: Dalla Storia alla Letteratura, dal Cibo alla Moda e all. Arte, 米ローニヤ
大学における日伊修好一五〇周年記念シンポジウムに
おいて伊文報告、二〇一六年一〇月二十四日

“Studio politico comparativo sulla Seconda Guerra Mondiale fra Giappone e Italia.”

Giornata degli italiani, イタリア文化会館において伊文
報告（同右の短縮版）、二〇一六年十一月二三日

“Studio politico comparativo sulla Seconda Guerra Mondiale fra Giappone e Italia.”

東京歴史科学研究会第五一回大会・総会、二〇一七年四月
二三日「平和」の内実を問うー「共生」のための課
題ー大橋幸泰「近世日本の移転的宗教活動と秩序意
識」安岡健一「基地とコンビナートー高度成長期日本
における社会変容と人々の意識」両報告に対するコメ
ント。

“The Axis Alliance in Global Perspective”, Columbia
European Institute-Universität Konstanz 合同フォー
クシヨンプ二〇一七年六月八日に英文報告

“The Foreign Policy Decision-Making in Comparison: U-

transnationalist Japan and Fascist Italy.”

The joint LSE-UCPH IR seminar 2018: Munich 80 years in Copenhagen on 25 September, 2018 （ドイツ・英文報告）

“Far Eastern Munich: Why and How the Mediation in East Asia Was not Possible.”

“Relational Studies on Global Conflicts: Toward a New Approach to Contemporary Crises” at Hotel Zira in Belgrade from 21–22 December, 2018 （ドイツ・英文報告）

“The Aftermath of Authoritarian Regime: Comparative Analysis on the Formation of the Japanese Constitution.”

第三回西日本ドイツ現代史学会（二〇二二年三月二八日）
「原田昌博『政治的暴力の共和国—ワイマル時代における街頭・酒場とナチズム—」（名古屋大学出版会、二〇二一年）をめぐって」コメントを担当。

Fascism, Resistance and Memory in the 21st Century, 二〇二三年七月一日、東京外国語大学ダブル・ディグリープログラム「公共圏における歴史」（HIPS）

の企画で英語基調講演担当

“Monarchies Compared: Japan and Italy.”

ISA Asia-Pacific Conference Tokyo 2023, 二〇二三年八月八—一〇日、早稲田大学においで八月一〇日 Thursday, Great Powers and Asia-Indo Pacific （英文報告）

“Defeat and Democratization: Italy and Japan after the Second World War.”

The Axis Reconsidered: Global Fascism, Mutual Representations, and Cultural-Political Relations, 二〇二三年一〇月一四—一五日、京都産業大学においで初日 Panel I: New Perspectives on the Axis and Global Fascism （英文報告）

“A Comparison of Pre-War Monarchies in Japan and Italy.”

二〇二五年度 歴史科学研究会 総会・大会二〇二五年五月二五日「時代区分再考」松戸清裕「ソヴィエト・デモクラシー—もう一つの民主主義—における政治と日常—」岩島史「戦後日本農村における生活改善のポリティクス」両報告に対するコメント。